



組 雜

回顧錄

(予の自殺するに至りし徑路)

(一)

私の居間は墓に對つて居る。茂れる綠葉は既に其盛りを過ぎて、朝夕は、ハラ／＼と病葉が散る。其間に散見する幾基の苔の石碑は、人生の半面を語るが如く思はれる。而して静寂なる初秋の夜の昨今、茲に鈴虫、松虫、蟋蟀等の哀音が闇に漂ふ。此哀音は實に此等墓の主の彼の世からの聲の様に私の心の糸に觸れる。悲しい細い絶えんとして絶えざる夢幻

雜 組 回 顧 錄

K F 生

的の音は、實に大自然と人生とを繋ぐ運命の糸其物の様、將た又人間流轉の悲其物の深奥よりの聲の様聞きなされる。此世に流轉のある限り、其處に永劫に涙がある、詩がある、やがては宗教がある。又私の居間には何の飾りもない。其四疊半の片隅に極めて古い白木の机があるのみだ。尤も此頃から傍の壁に一枚の石板摺の繪が張つてある。「そんなに氣に入つたなら遣らう」と云つて友が壁から剝いて

(一)

呉れたのは、此頃の事であつた。朝夕眺める毎に不思議に私の心に滲み入る様な感じがする。水天髣髴の彼方に沈んだ夕陽の名残に向つて、一人の美人が磯の松原に立て居るのである。紫紅の夕映、無限の沈黙を守る海、暗愁の氣に満てる秋の松原、此等の背景は悲しき平和の色を成して居る。其一本の松に身を倚せてスラリと立つた若い美人は此大景の精の凝りかと思はれる。私は其引緊つた憐れ氣な、何かを追慕するやうな顔がどことなく誰れやらに似て居ると見る毎に思て來た。併し思ひ當らない。只似て居る／＼と私の心を引付けるのみであつた。

一夕私は戸塚原に武藏野の末に落ち行く夕陽を追ひ、夕間に包まれ行く大自然の中を逍遙した。歸つて机に寄り、兩戸を開けば、眞黒な木立の間を星の光が洩れて居る、而して例の哀音が寂しく流れる。ランプを燈す氣もなく恍然として聴きとれた。やがて傍への繪に眼を轉すれば、障子越しなる廊下の燈

火が、其繪姿を靡ろに浮立たせて見える。ア、彼の人に似て居る、彼の人を若くした様だと見れば見る程似て來る。「もう此兒を與れて仕舞へば、妾はホン／＼一人坊ちになるのですが……」といたいけな四歳の女兒を眺めて暗然とした其横顔にそっくりだ……と思へば溜らない。潜んで居た記憶が雲の様に巻き起つて來る。彼人は今何處に居るのだらう。達者かしら、運よく暮して居るだらうか。女兒はどうなつたらう、大層弱い親懐つこい子であつたが。どうか、もう一度會つて其後の消息を聞き度い。そして奇しき悲しき運命を語り度い。生れ更つた私を見せ度い。

(二)

慙ふ云ふた處で、何も世に謂ふ青春の色の戀の云ふのではない。強いて云ふなら悲哀を戀したとて云ふはふか。それが或る悲しき機會の爲めに一部の人に誤解された。其結果でもあらうか、彼女は其後

行方を隠した。

事實は次の様である。

私は今から殆んど五年前、決然志を立て、上京した。田舎の小百姓の子が東都遊學には相應の理由がある。私は郷里の師範學校から卒業三ヶ月前に退學を命ぜられた。小學教育者には不適當であるからと云ふのである。私に取ての此在學四年間の歴史はと云へば、最初一ヶ年間は望郷の情と、軍隊的な生活の苦しさ、母親を失ふた悲嘆との裡に暮れ去つた。その後は、學期試験はその前一週間も勉強すれば間に合ふから日常餘力は外に溢れて、燕趙悲歌の大言を弄して學校の形式教育を罵倒し、自治を迫り、教員進出策を講じ、或は學科を捨て、英語と數學を自修した。餘暇に禁制を破つて小説を秘し讀みし位位のものであつた。これでは退學處分は當然である。自分で首唱者になつて追出した五人の教員の崇りでも、疾うに首を斬られ去る可きであつた。いく

ら其遣り口が巧妙で、罪跡を捉ふる緒がなかつたからとは云へ、四年間官費で養成されたのに、學資の辨償さへも要求されずに出されたのであるから先づ寛大な處置と私自身丈については云ひ得るだらう。併し同時に退學を命ぜられた、廿人の諸君は、孰れも氣の毒千萬である、教員の誤解や、見せしめやの爲めに犠牲となつたのだと斷言して憚らない。私は寧ろ此等諸君の或る人々と同等な處分を受けたのを濟まない様に思つた。けれど兎に角耻辱である、憤慨に堪へんとの念は止め度なく胸を掻き撈る。是非上京して偉くなり校長に一ト泡吹かせなくては男子たるの面目がないとの不負魂に驅られた。で父に懇願して、月十圓づゝの學資の仕送りを仰ぐことになり、上京してさる學校へ入學した。哲學文學政治學等を修めて文明批評家になる志であつた。そこで同時に退學を命ぜられ、同じ學校へ入學した且君と神樂坂のさる横丁の一間を借りて自炊を初めた。且

君は法律を研究する志望であつた。盲蛇とても云はうか、其間は待合の近隣であつた。今では思ひ出しでも赤面する程であるが、當時は平然自若たるものであつた。待合なるものゝ意義を知らなかつた上に會稽の耻を雪がずばとの一念の外は無い。併し井端に米を洗つて居ると、通りすがりの魔性の者が、洗つて上げませうなどと振り返るので流石に不快を感じて一ヶ月程で越した。越して來たのは市谷山伏町のある閑静な住居の奥の六疊であつた、全く別世界へ來た程に思はれた。二人は此處で自炊を二年半繼續した。

二年半の自炊生活と云へば、長い様であるが、振り返り見れば極めて短い、殆んど時の觀念は抜き去られて居るかの様にさへ思はれる。二人で仲よく、樂しく、旨い飯を氣儘に喰べた、面白かつたと云ふ外は無い。

かく云へば極めて簡單であるが、時の流れは人間

に變化を與へ運命の糸は奇しく我等を操るものである。今其一部を述べて見たい。先づ初めから順序を追うて書かう。此家の主人は〇〇と云つて五十歳以上の、憔悴した人で、市の衛生掛である。妻君は、見た處三十三、小づくりの品のよい人。それに五歳位の男兒と、一二ヶ月の嬰兒と、これ丈が家族であつた。そして二階に一人の書生が同居して居た。主人は朝六時前後に出勤して、夕方五時頃歸るのが常であつた。歸つて後も妻君と談笑するのを耳にする事は殆んど稀で、只時々咳拂ひをするので在宅だと知られる程であつた。妻君が同じ國であると聞いて頼りない私共は、何となく心強かつた。家庭が静かであるから、勉強も思ふ様に出来、愉快に生活を續け得た。尤も〇〇夫妻に對しては、非常に謹直で餘り打解けた無駄話もせず過ぎた。夫妻は堅い書生であると信用して居たらしかつた。二階のK君も同じ學校の學生で温順な勉強家であつた。次第に

親しく交際するやうになつた。玉君は尺八が上手であつた。彼の咽ぶが如き音は逝く春を悼み、時雨に滅入る我等の胸に、悲しき妙音楽と響いた。

かゝる間に、此家の男の兒は學校へ行くやうになり、お静さんはチヨカ／＼と庭歩きをする迄に成長した。主人は日に増し寢れるのが私共にさへ目につく。役所から歸れば直ぐ寢て仕舞ふ。それでも毎日出勤又はする。出て行く後ろ姿を見ると實に命の影が薄い。妻君は、「子供はどう育てるがいでしやうね」と尋ねては、私などの個性發展、獨立自治の精神養成主義を謹聽しながら、實際は甘やかし勝てある爲か我儘の仕方題、それにお静さんが、弱い癩の強い子で夜泣きをするので、負ひ通しの夜なども時々あつた。「妾のやうな運の悪いものはありますまい。両親に早く別れ、矢笠しやの叔父さんに厄介になり、其上宿はあの通り弱いし、子供は小さいし、ほんとうに、苦勞しに生れて來たのでしやう」と度

々繰り返すのを聞いた。併し一度も夫と角立たつた言ひをするのを聞いた事はない、いつも夫をいたはり、子供を可愛がり、私共にも其度毎に笑顔で對ひ、よく笑ひ、よく話す人であつた。家族に對する關係や觀察は、先づ大躰こんな風で取り立て、云ふ程の波瀾もなかつた。井端などでは、隣家の妻君や、娘など、も知り合になり、時々戯談を云ひ交して、自炊の不平をそれに控ね返して居た。又近所には其家の男の兒の遊び友達が二三人あつて、私共の座敷へ漸々遊びに來るやうになつた。私共は此子供を相手に唱歌を謠つたり、お伽噺を話してやつたりして、友達のない淋しさを忘れて居た。子供はよい叔父さんが出來た氣になつて、一緒に飯を食ふ事もあつた。豆腐屋を呼び入れたり、八百屋への使に彼等をよく頼んだものだ。恁麼工合であるから、人嫌をするお静さん迄も私共には馴れた、殊に私にはよく懐いて、私が守をすると半日位は遊んで居た。「宅のお静はな

ぜ貴下(あなた)にばかり懐(なつ)くのでしやうねエ)と妻君(さいくん)が泌々(しみず)云つたのも一度や二度ではなかつた。私も何故(なに)こんな無愛相(ぶあいさう)の、恐(こわ)い顔(かほ)の男(をとこ)をお静(おしず)さんが嫌(きら)はなかつたのか解(わか)らない。涼(すず)しい大きな眼(め)で、睫毛(まつげ)の長い、弱(よわ)々(わ)しい子(こ)であつた。かく澹々(たんたん)たる間に二年半(にねんはん)経過(けいこ)し且君(かつくん)が學校(がく)を卒業(そつぎょう)したので、自炊(じすい)生活(せいかつ)を止(と)めて、二人(ふたり)は相分(あひわか)れた。丁度(ていど)二階(にかい)の五君(ごくん)も卒業(そつぎょう)して國(くに)へ歸(かへ)つたから、私は二階(にかい)へ移(うつ)つて、賄(まわ)ひを妻君(さいくん)に頼(たの)んだ。昨年(さきねん)年田舎(ねんいなか)から出(で)て中學(ちゅうがく)へ通(かよ)つて居(ゐ)る、妻君(さいくん)の從弟(じゆてい)と机(つく)を並(なら)べて居(ゐ)た。彼は御嶽(おんたけ)節(ふし)が上(じやう)手(て)であつた。

これから後(のち)の一年(いねん)間は、私の起居(せいきよ)には格別(かくべつ)の變化(へんくわ)もなく、毎日(まいにち)學校(がく)へ通(かよ)ひ、其餘(そのほか)暇(ひま)には圖書館(とくしよかん)で出来る(で)る文書物(ぶんしょぶつ)を讀(よ)んで、遊(あそ)ぶことは殆(ほと)んどなかつた。主人(しゆじん)人は益(ますます)衰弱(すいじやく)して、冬(ふゆ)になれば缺勤勝(けつきんかち)である。二人(ふたり)の兄妹(けいまい)は我儘(わがまま)の競争(きさう)であるが、主人(しゆじん)はこれ(これ)を叱(しか)る元氣(げんき)もないらしい。頻(しばしば)りに咳(せき)き入(い)つて苦(くる)しむ許(ゆる)りであつた。妻君(さいくん)一人(ひとり)が朝(あさ)から晩迄(ばんまで)氣(き)を揉(も)んで居(ゐ)る。お静(おしず)

さんに泣(な)き明(あ)された翌朝(よくあした)は、一入面(ひとしほ)裏(うら)がして見(み)えた。

(一一一)

朝夕(てうせき)の起居(せいきよ)は、斯(か)く單調(たんてう)であつたが、此間(このあひだ)に私の精神(せいしん)には非常(ひじょう)に大(おほ)きな變動(へんどう)を來(きた)した。殆(ほと)んど世(よ)を擧(あ)げて暗黒(あんくわく)の深淵(しんえん)に卷(ま)き込(こ)まれるやうな氣(き)が日(ひ)に日(ひ)に募(も)つて來(き)た。

私は小兒(せうじ)の時(とき)から大層(たいらう)不負氣(ふふき)の、意地張(いぢぢやう)りて人(ひと)に後(ご)れるのが嫌(きら)ひの性(しやう)であつた。冬(ふゆ)など朝飯(あさひやく)が間(ま)に合(あ)はないと、飯(いひ)を食(た)はずに夢中(むちゆう)になつて學校(がく)へ驅(か)け付(つ)けた事も度々(たびたび)あつた、又何(また)か爲(な)り始め(はじめ)ると、どうしてもそれを仕途(しと)げなければ措(か)けない凝(こ)り性(しやう)であつた。十二三(じふにさん)歳の頃(ころ)山(やま)から松(まつ)の木(き)を伐(き)つて來(か)て、一挺(いつてい)の小(ちひ)さい丸鑿(まるざく)で、口徑(こうけい)一寸(いっすん)の煙管(えんくわん)の筒(つづ)を堀(ほ)り上げた事(こと)と、二里半(にりはん)の道(みち)を一日(いちじつ)も遅刻(ちやく)せず(せず)に三年間(さんねんかん)中學校(ちゅうがく)へ通(かよ)つた事(こと)などでも其(その)一端(たん)は知(し)れる。それだのに、非常(ひじょう)に小(ちひ)さい、弱(よわ)い子(こ)で、泣(な)き虫(むし)で、一人遊(ひとりあそ)ぶのが好(す)きで

あつた。微かに覺えて居る頃の事で、一番辛かつたのは、夜間寝られない事で、家内が寢静まつて、其寢息が、淋しく凄く心に喰ひ入ると、溜らなくなつて、變な氣がして來ては、果はシク／＼泣いたものだ。又家庭で角立た物言をするのを小さい林に聞いては、涙を頬に傳へながら、西行と云ふ坊さんは、雲水に身を托して六十餘州を巡り歩いたと云ふ事だ。家の屏風に張つてある西行が月を眺めて居る繪姿が戀しい、坊さんにならうかなどと思ひ寝た事もある、時とすると死んだなら人は何處へ行くだらう、死んだ弟は賽の河原に石を積んで居るだらうか、鬼に苦しめられて、泣いて故里の方を見返りはしまいか、あれに杳かに立つ煙、あれこそわれ等が故里だと石を叩いてなつかしがらうだらうかなど、考へた事も度々あつた程で、非常につまらぬ、果敢ない考をもつて居た。此正反對の二つの性質が常に相纏綿して私の前半生の哀史をなして來た。併しそれは、今云

ふ必要はない。さて私は上京以來身を碎いても成功しなくてはならん、偉くならなくては面目が立たぬと、只其事のみを念頭に掲げて勉強した。勉強しなへすれば偉くなれると信じて疑はずに、専心書物を読んだ、他人の爲めに盡すのは無益であるとの念は、師範退學一件で強く心に刻み付けられた。自分さへ勉強すればよい、學生時代に他人の爲めなど測るのは誤つて居る、友人を作る必要もない、一直線に自己の修養の途を進むが學生の本分であると思ひ込んで居た。上京後一年位はそれで何の變化もなかつたが次第に考が動いて來た。一體何の爲めに勉強するのか、偉くなるのはどんな事か、成功するとは高位高官に昇り、金銭の山を作ることか。萬有は流れるではないか、名譽が何か、財産が何になる。只管金銭の奴隸となり、學問研究はこれが準備であると思做すに至ては實に唾棄す可きではないか。ては所謂精神的に大事業をなすことか、精神的事業と

は如何なる意味ぞ。抑も人間の正體が分らないては
ないか、道學者の教へる處が眞理か、自己の本能に
従ふが誠か、解決出來て居ないてはないか、精神的
とはこの孰れに従ふことか、哲學者倫理學者の所説
は何れも抽象的である、生きたる人間を如實に切り
開いて我等の前に提供しては呉れない、彼等の言は
我等の實生活に對して何等の力をも與へない。加
之、更に進で、本來人間は何の目的あつて此世に生
れたのか、何處から來て何地に消え去るのか、永遠
に萬有を吞吐する此大自然と人生との關係はどうて
あらうか、逝く者は皆忘却の深淵に葬られ去るては
ないか、而して果敢ない生を享け居る此人生の姿は
どうか、見れば見る程矛盾の集積である、本能と道
徳、個人と國家、利我と愛他と互に相剋して 其處
に暗黙の間に恐ろしい修羅道を現出して居るてはな
いか、人生は虚偽を以て成り立て居るてはないか、
これを氣付かない間は人生を樂しむ事も出來やう、

(八)

知つては一刻も生を享樂するに堪へてはないか、
生存の魔の手は恐ろしき力を以て若き老いたる人々
の血を涸らして行くてはないか、人間は生きんが爲
めに、あらゆる辛慘を嘗めねばならぬのか、成る程
それが人間の運命であるならば仕方もないとした處
で、生活の持續の爲めに全然自己の本性を没却して
虚偽の下に盲動しなければならんとあつては、所詮
堪へられない。自分は前から清貧に甘んずるの一念
は強い、何も財産や名譽が望みではない。併し我が
心は飽く迄自由ならんことを望む、我が人格の絶對
性は何物を犠牲にするも保持し度い。處がそれが果
して得られやうか。疑はずに先哲の書を讀めば人生
が解決出來やうか。幾千年に亘る東西思想家の著書
は、總て自己の失敗の懺悔録ではないか。いくら書
物を讀んだ處で最後の問題は解けずに残つて居るて
はないか、されば此實生活は斯く迄悲痛の集積であ
り、精神的慰安は永へに得られないとすれば、果し

て何の目的があつて生きるのであるか。人生は何處に生存の價値があるのか。「生は寄なり、死は歸なり」と支那の哲學者は云ふたではないか、六慾煩惱の絆を絶て其處に寂靜無邊なる涅槃の天地は開くるぞと印度の教祖は教を垂れ給うた。人生は穢土也涙の谷也と西洋の詩人は現世を呪ふたではないか。親兄弟は、我が健康、安福を望むであらう、非業の事があるならば彼等は身も世もあられない程悲しみ嘆くであらう。親に不孝は爲度くない、兄弟に涙は流させ度くはない、友人知己に失望悲嘆を與へ度くはない、併し我は飽く迄我である、我が精神は我の自由である、我が身躰は我れの勝手である、生存の理由を認めずに蠢々として百年の壽を保つとも、何の意義がある。悲痛の集積の裡に悶ゆる必要が何處にある、一死以て此悲痛の絆を絶つに如かずなど、考へるやうになつた。これではならんと心を抑へ付けて益々書物を耽讀した。併し「學問をしても何にもならん」

との念は、心の何處からか漏れては私を苦しめて仕方ない。次第に問題は具體的に痛切になつて來て、日本の社會狀態を對照とし、茲に幡る幾多の矛盾缺陷虚偽を排して、最後の解決を、我が全生命を捧げて試みやうと決心した。それ故熱心に日本思想史の研究に勉め、社會現狀の觀察に意を注いだ。かくて一個の人生觀を建設しやうと努力した。丁度此頃から私は少し健康を損じて來た。これが二階へ移つてから一年目、私の學校生活一年を餘す時であつた。幸ひ暑中休暇になつたので、少し保養しやうと初めて故郷に歸臥した。

故山の二ヶ月以上の夏は餘り面白くもなかつた。悶々の情が堪え難さのみで、時々茫然として山國の夜氣に憧憬して夜更しをする位のものであつた。併し大抵は農蠶の爲めに忙殺されて居た。

此頃には、私はもう、どうしても生存の理由を認め得ないやうになつた、生きて居る必要は露許りも

ない。如何にして世を去る可きか、其方法に苦心して居た。

(四)

處が九月下旬になつて、同室の中學生から、例の主人の死去の悲報を傳へられた。私は今更の如く、人命の測り難さを驚き、次て妻君の身の上を思うて悲嘆の情を抑へ得なかつた。一刻も早く上京し度いとは思つたものゝ折悪しく稀有の大洪水の後とて、交通機關は全然杜絶して一步も踏み出せない。止むなく在京の友に托して荷物を引き取て貰ふことにした。これは妻君一人の手では現状維持は出来まいから家を疊むだらうと推測したからである。かうなつたので、私は第二の家庭の如く思て居た在京の一家に對しては、これが永遠の死別生別になるのかと、實に流轉の悲みに膈を千切られた。

祖母の葬式や、其他色々差支があつたので、私は、やうやく九月下旬に上京した。妻君は涙乍らに夫の

臨終を物語り、子供二人を抱いて途方に暮れて居ることを悲しみ、最後に當分身の振方の定る迄此儘に居度いから、就ては氣心の知れて居る人ではあるしするにより、どうか前通り同居しては呉れまいかとの話であつた。私も非常に氣の毒に思ひ、其上もう長く此世に居る氣はなく、歳末迄には斷然たる處置を取る決心であつたから、せめて此世の思出に不運な妻君の相談相手にもなり、又憐れなる一家の落ち行く運命の先途をも見届け度いやうな氣がして、前の如く二階に中學生と起居を共にした。

夜になれば、隣の妻君達がよく階下へ話しに來た。寂しがつて居る妻君を感れる爲めである。私は自己の心血を瀧ぐ可き遺片身の論文を十二月末の母の命日迄に書き上げる豫定である上に、或る翻譯物もあつて非常に多忙である爲め此話し仲間になつた事は殆んどない。學校へは無論出ない。親しい二三の友人が稀に尋ねて呉れる、それも私の突飛な言や、危

險な思想に驚いて、「△△は危い、精神的危機に際會して居る」と云つて、警戒し合ふ様になつた。私は少しも友人の忠告などは耳にしな、只一直線にと暗黒界へ迷ひ込んだ。世を擧げて自分の敵であり、萬有は一切悲寥の種としか見えない。見るもの聞くものを悉く冷酷に解し、自己の孤獨を泣く材料として満足した。早く悲痛若悶に満てる命の絆を斷ち切り度いとの一念の外はない。日に増し此念は募る。それと共にいよゝ努めて論文構成に苦心した。併し朝夕の生活状態には餘り變化しない。傍の中學を相手に戲談を云ふ事もあり、妻君を笑はせるやうな話もし、或は隣りの娘に減らず口を叩いて勝手に元居るお袋に睨まれたりした。尤も私は妻君の行末に關しては、いつも眞面目に相談相手になつて、共々心配した。

妻君の話によると、亡夫の實弟が國に在て相應に暮して居るが、遺族を引取らうとはしない、せめて

長男だけの世話をと嘆願しても、何の彼のと云つて聽かない。加之、田舎にある亡兄の少許の不動産をも我が手に入れやうと腐心して居る。で此人に手頼らうなどは思ひもよらない。反對に妻君を育てた叔父は子供二人を伴れて歸つて來い、女の身て子供を抱いて東京に居てどうする事が出來やう、田舎へ來れば何とか心配して身の振方を付けてやるからと度々云ふて來たそうである。併し妻君は再び田舎へ泣いて歸り、叔父の厄介になるに忍びない。止むなく長男のみをこゝに托し、お靜さんをば親不知で相應な家へ里子に遣り、自分は麴町の叔母に當る人の世話でさる華族の邸内へ奉公に行かうかと思ふとの話であつた。併し出來るならばお靜さんを手放し度くはない、又今更究屈な奉公三昧は仕度くない、二人で暮し度いそれには今迄通り素人下宿でもして居たならばとの風が大分見えた。

(五)

十月末の時雨の寂しく降る晩であつた。隣家の妻君達も話しに來ない。私が便所へ下りた歸りを呼び止めて、寂しいから是非暫く話して呉れると云ふので、私も終ランプの傍に坐り込んだ。妻君は長男の洗張の着物を縫つて居た。暫く世間話をした後、妻君は針の手を止めて

「ねえ、△△さん、かうして長男は田舎へやり、お静は餘所へ呉れて仕舞へば、もう二度と三人が一緒になる時はあるまひと思つて、今日は寫真とりに三人で行つて來ましたと」一寸私の顔を見て、直ぐ自分の膝に目を落して、色の褪めた前懸を撫で、居る。これが此妻君の癖である。私はこみ上げる悲しさを抑へて。

「併し遭れないとも限らないでしやう。達者でさへ居れば、何時三人落合ふかも知れません、兎に角寫真を取たのは結構です。後々お互に運よくなつて、昔を語り合ふ時によい紀念になりませう」

妻君は長男の頭を撫でて

「だつてこれには遭れますが、お静は呉れて仕舞ふのですから」と又私を見た。云ふ可からざる悲痛の色が動いて居た。私はランプを見詰て、
「だが、確かな處なら、公然母子とは名乗れないにしても、遭れる道はいくらもありませうから」

「でも、お静は弱い子なんですから、他人の手にかゝつたなら育つまいかと心配でなりません、」

「親御の身としては御尤です、併し當つて見なければ解りますまい、此間お話のやうに、新聞へ廣告して見ませうか」と私は促すやうに妻君の決心を求めた。

妻君は、夜も碌々寐ずに骨身を削つてこれ迄にした、いたいけ盛りの兒を入手に渡すとは情ないと、泣き乍ら私の云ふのに同意し、それから亡き主人との關係について次の事實を物語つた。

妻君は、早く両親に死なれ、頼りない孤兒となつ

た。叔父なる同郷の醫者が引取て育て、呉れた。峠を越して向のさる宿場の親戚つゞきの豪家へ嫁に行く事に内約が整ふて居た。處が叔父が、何かの機會で其家と感情の衝突を來した結果、養女の婚約をも破棄して仕舞た。これ丈は元の鞘にと先方から折れて來たのを一酷な叔父は素氣なく斷つて、其地の警察署長に嫁合せた。これが妻君の十九の春であつた。思ひ合つた若い男と引き裂かれ、年齢の十五も違ふ遠國の人に嫁ぐのは、田舎氣の乙女としては、何よりの悲しみであつた。併し義理ある叔父に對つて反抗も爲兼ねて、泣く々々婚儀を濟ました。間もなく、署長は職を辭して（其理由は云はなんだ）東京へ出た。其後十九年の生活は、萬事志と違ひ、悲惨な事のみ打續き、且つ二人の間柄は形式上の夫婦と云ふ以上の温かさはなかつた。けれども妻君は、これが自分の運であると諦らめて、夫に仕へて來た。その果が幼い子供を遺して先立たれた始末である。恸

ふ話して、それから

「つい、自分の愚痴ばかり申して濟みません、妾は今迄誰れにも這麼話をした事はなかつたのでした」と云つて、箆笥の上の白い位牌をふり返して、

「でも、宿はほんとうに潔白な心の人でしたよ、お金の事なんか妾に任せつ切りで、一度も世話を焼いた事は御座いませんでした。……」

折柄一としきり吹き荒む風の音におびえてか、お静さんが泣き出したので

「ぢや、明日新聞へ廣告しませう、お休みなさい」と立ち上ると

「お休みなさいまし、とんだお邪魔を致しました、何分……」と云ふのを聞き捨てに二階へ上つた。

それから二日経つた小春日和の十時頃私はお静さんを抱いて、猫の顔を書いて見せて居ると、妻君は手を拭き拭き昇つて來て

「オヤ、大層い、猫が出來ましたこと、サア、

「静ちゃん母ちゃんとお使に行きませう、ほんとうに△△さん、お邪魔ばかりして済みませんです、妾が一寸油断をして居ると、直ぐ上つて仕様が御座いませぬよ。これからは恐い顔をして頂戴」と例の涼しい目で喰ひ入る様に私を見た。私はお静さんを見乍ら、

「此上恐い顔をしたら大變だ、叔母さん、今お静さんが面白い話をしましたよ」

「ホホー、どんな話したの」とお静さんを見る。

「お静さんが、僕の頸を撫で、(お父ちゃんの鬚澤山あるよ)と云ふから(お父ちゃん何處へ行つたの)と訊くと(お父ちゃんお墓へ行つたよ、もう歸らない、恐い目して居るよ)と云つて、白目をして見せましたよ」と淋しく笑ふと

「マア、いやな兒ですネエ、宿を棺へ入れる時、見て居たからなんではやう」

「そんな處を子供に見せるとは非道い、一生其顔が

思出す種にならなければいゝが」

「だつて誰も子供の世話をして呉れる人がなかつたんですもの、まさか覺えちやあ居ないでしやうねえ」と目を屢叩く。

「まだ小さいから」と云ひ乍ら、お静さんを抱き上げて

「サア母ちゃんとお使に行くんですよ」と妻君の背に負せてやつた。

(一六)

十一月末に私は柳町へ越した。その三日目に、圖書館歸りの夕方、妻君の許を訪ねた。丁度長男を田舎へやると云つて荷造りをして居る際であつた。お静さんは泣いて居る。何故かと訊くと、妻君は、

「長男が(僕は田舎へ行くよ)と云つたので泣き出して、どうしても黙りませんで仕方がないんですよ、何だか自分には解らないでも只荷物なんぞ造るから、どうかされると思つて泣くのでしやう」と悲

しをうに話した。私は犬や猫さへ心があるものをと
思ひ乍ら、荷造りを手傳つた。妻君は眼瞼を赤くし
ながら、私が止めるのを聴かず、繪草紙やメン
コや學校草履など迄入れて、

「田舎へ着いたらお爺さんにお辭儀をするのです
よ」とか「田舎は寒いから風邪を引いちやいけない
よ」とか「着いたら、自分で手紙を書いて、母ちや
んに送つてお呉れ」とか云ひ々々聲で笑つて眼で泣
いて居た。麴町の叔母の家に國へ歸る人が待つて居
るので、其人に依頼して、九時の夜汽車で新橋を立
つのださうである。長男が俵で麴町へ行つた後を妻
君も追ふ筈であるから私は「ぢやあ、お大切に、新
橋へは行きませんから」と云つて別れた。

十二月初めに妻君から端書が着いた。お静さんを
連れて麴町の叔母の許へ身の定る迄厄介になるとの
意味が記して、終りに今度の始末について呉れ、
も禮を述べてあつた。

此月の下旬に、妻君はお静さんを負つて私の寓居
を訪ねた。私は新年早々東京を去て、房州へ行く計
畫を立て、居た。それで心では、これが此不運な母
子を見る最後であると思ふから、懷しさ悲しさも亦
一入であつた。夕方から宵の九時頃迄色々話し合つ
た。其話の間に、妻君は、新聞廣告のお蔭で、お静
さんの貰ひ人が三四人あつた、其中で、小石川の家
作業をして居る樂な家へ呉れる約束になつて、時々
お静さんを連れては其家庭へ馴らしに行つて居るが
人嫌をして困ると話した。「モウ此兒を呉れて仕舞へ
ば妻はほんの一人坊ちになるのですが……」と云
つてホロリとした。

妻君は歸るからと立ち上りながら

「貴下はもう立派なお方におなりなさるに定つて居
ますが、どうぞ時々はお便りをして下さいましな、
今度の事では大そう御厄介様になつて何ともお禮の
申様も御座いません、ほんとうにねえ」と泣き云

ふ。

「いゝえ、お禮は僕の方で申上げる可きです、東京へ来てから今日迄三年半も御世話になつた御恩は死んでも忘れません」と云ひ乍ら私は妻君の後ろに廻つてお静さんに毛糸の頭巾を被せてやりつゝ、「いゝ子で大きくおなりよ」と其頭を抑へると、妻君は會釋しながら

「どう致しまして、私こそお禮の申様は御座いません、随分御心配をかけまして、ほんとうにお氣毒様でした。その所爲もありませうか此頃はお寢れになつた様で御座いますよ。どうぞお願ですから、お身軀を大切にして下さいまし。房州へ入らしたなら、ゆつくり遊んで被入いまし」

「ハア有難ふ、僕はどうせ構ひませんが、貴女もよくしないうて、未長く運の開ける日をお待ちなさい」と縁に送り出した。

カラコロと小刻みな日和下駄の音が、氷つた闇の

中へ次第に淋しく遠く消え去つた。

私が房州勝山に半ヶ月の滞在中の生活状態は自殺手記にも書いた、今更語る必要がない。一月廿日の夕方汽船の上に引き上げられた私の血の死骸は、其夜築地のさる病院で蘇生した。都下の或る新聞は、私の此記事を色取るに妻君を引出して、戀愛的色彩を以てした。

細君はこの記事を見たかどうか知らないが其後少しも便りがない。(をばり)

余は何故に文士劇に入りしか

荒川重秀

自分じぶんは小兒こどもの時ときから芝居しばいは好すであつた。母ははもまた好すであつた。よく母ははと共に猿若町さるわかつちやうに行つたものであ